

日本・イタリア 交渉史雑話

東光 博英

イタリアとの関係でまず想起するのはマルコ・ポーロである。彼の『東方見聞録』は初めて日本を西欧に紹介しただけでなく、後の大航海時代にも大きな影響を与えた。さらに、その時代になって西欧と東アジアの直接交渉が始まると、日本に最初に渡来したのはポルトガル人であったが、当時の日本に関する貴重な記録を残した人の中にもやはりイタリア人がいた。この人はニコラオ・ランロットというイエズス会士で、フランシスコ・ザビエルの同僚である。ザビエルを日本に導く直前のヤジロウ（鹿児島出身）から日本の事情を聴取し、イタリア語で記したのであった。この「ランロットの日本情報」は、同じ頃に書かれたポルトガル人J. アルヴァレスの日本見聞記とともに、ザビエルの日本布教の基本資料として、キリスト教伝来を促すことになる。貿易や布教ではポルトガルが主導権を握っていたとはいえ、このように日伊両国の因縁は日欧交渉の発端からすでに存在するのであり、この時代に来日した著名な西欧人にイタリア人が少なくないことを見ても、その因縁には浅からざるものがあると言える。

また、このような受動的な関係ばかりでなく、日本からの働きかけについても、当時のイタリアを訪れた日本人としてつとに有名なのは天正遣欧少年使節や慶長遣欧使節であるが、ローマを最初に訪れた日本人は彼らではない。ザビエルが日本で洗礼を授けたうちの一人、鹿児島人のベルナルドである。彼の日本名は不詳で、日本側の記録にもないが、単身ポルトガルに渡った後、1554年末にナポリに上陸し、その翌年、ローマに達している。今年（2015年）はベルナルドが日本人として初めてイタリアの地を踏んでから450年という記念の年に当たる。イエズス会の当時の記録には、「まことにザビエルの弟子たる面目躍如たるものがあつた」と彼に対する讃辞が残されている。

今日、イタリアとの交流が多彩に行われる中、

特に筆者が興味を覚えるのは宮城県石巻市である。同市は、伊達政宗の命により支倉常長を大使とする慶長遣欧使節が1613年にローマをめざして船出した町として知られ、使節が上陸したイタリアの港市チビタベッキアと姉妹都市の関係にある。常長は徳川幕府のキリスト教禁止・弾圧という不利な状況下に外交使節として南欧のキリスト教国を訪れ、スペイン国王と貿易交渉を行いローマ教皇に謁見するも、その旅は苦難の連続であり、成果を得られぬまま帰国した。まさに不遇の使節であった。しかし、石巻市にはそれよりも、日本人が自ら建造した洋式帆船で太平洋を越え、メキシコからさらに大西洋を渡ってローマにまで到達したことや、スペインでは逆境のなか困難な交渉に尽力した事実から現代に通ずる意義を見出し、これを未来へ活かそうという積極的な考えがあるように思われる。

市内に、使節の乗船を精巧に復元した記念館「サン・フアン館」がある。2001年秋、ここでイタリア所蔵の使節関係品が公開された。ボルゲーゼ家由来の支倉常長を描いたとされる有名な武士肖像画である。石巻市出身で京都外大大学院OBの高橋譲氏によれば、肖像画を借り出すのに1年がかりの交渉を要したという。イタリアとの交流事業に深く関わってきた同氏の仲介で、筆者が石巻市の関係者と面談して感じたのは、郷土の歴史に対する官民あげての熱い思いである。たとえ国際交流の動機に歴史的な裏付けがあっても、それがなければ事は成就しない。実際に筆者は九州のある町で、歴史がありながらその中核となるモノがないために、テーマパーク風の施設を造ろうとしたものの、やがて財政難のために計画が頓挫した例を知っている。しかし、石巻市の場合は幸い施設があり市民の関心と熱意もある。謎の多い慶長使節の史実解明にも力を注いでいるようなので、これが美化に走らず厳正に行われるならば、単なるお祭りの交流でなく、学術面でも大いに貢献するであろう。国際交流は、脚下照顧、郷土の歴史を知ることから始まるのかもしれない。

とうこう ひろひで

（非常勤講師・日本・ポルトガル交渉史）